

歴史都市京都の地場産業の継承と保全に関する産学連携プロジェクト

プロジェクト代表者：文学部・教授 矢野桂司

共同研究者：木立 雅朗、赤間 亮

【研究計画の概要】

本プロジェクトでは、歴史都市京都の伝統文化を継承・保全し、かつ活性化することを目的として、伝統工芸と伝統芸能に関して以下の2つの研究を実施する。

(1) 伝統工芸として、友禅染に焦点を当て、京都の伝統工芸を象徴するシステムである「分業制」を問題視し、産学連携のプロジェクトにおいて問題解決の糸口を探ることを企図する。

友禅染の制作をそれぞれの工程において現在最高レベルの職人に依頼し、職人の聞き取りを中心にして分業の実体を明らかにする。その意義と課題をあぶり出し、次世代に繋げるためにはどうしたことが必要であるか、深く検討する。また、その聞き取り調査の成果をまとめ、海外の研究者を含む関係者を招聘しシンポジウムを開催し、京都の関係者の方々と意見交換を実施する。

(2) 伝統芸能として、能楽分野に焦点を当て、能楽師の教育システム、能装束や能面などの道具制作、ならびのその原材料生産問題、教科書である謡本出版システムの問題、観客や愛好者を育てるプロモート活動の可能性などについて、検討を加える。また、関西地域全体において、伝統芸能がどのように公演されているのか、公演情報蓄積を行い、今後の動向を探る指針とする。

歴史都市京都固有の「分業制」は市内に分散して成立しており、火災や水害などの災害から伝統工芸や伝統芸能を防ぎ、継承するためのシステムとしても機能していたと考えられ、「分業制」の具体的な歴史の変遷過程の理解を深めることは、伝統文化全般の継承問題を考えるための基礎的な整理作業ともなることが期待できる。

本プロジェクトは、第6部会「日本文化DH拠点との連携」から波及したアート・リサーチセンターとの連携プロジェクトである。今回は、地場産業の協力を得て調査を進め、京都の伝統工芸や伝統文化を災害から守り保全・継承するための研究へ、デザイン面・産業構造面での成果還元をしたいと考えている。

【研究成果】

I. 研究成果の概要

(1) 上記の産学連携のプロジェクトを通して、伝統的技法の多様な活用、特に京都の染織業界の方々を中心とした活用を想定して研究・調査をした。その間、現在の染織産業の問題点をすどく指摘し、職人の育成を訴えるチームを知ることができた。彼らの指摘を受け、手描き友禅や型友禅を製作しその作業工程を記録した。技術者の技術の高さに驚かされる一方、作り手の側に入り込むことで、現状の厳しさと業界が抱える多くの課題が浮き彫りになった。研究成果については、国際シンポジウムや展覧会での公開の他、聞き取りの様子を編集したビデオや文字起こしをもとに、研究論文以外にも今後様々な媒体で成果発信・社会還元を行っていく。

(2) 伝統芸能については、能楽の伝承・教育システムについて、日本国内・海外、玄人・素人

という視点から、継続的に調査を行った。能装束の製作にかかわる西陣の見学、演者側による能装束・能面展の展示活動のサポートの他、伝統芸能に関する専門書館である大谷図書館との連携プロジェクトを開始した。また、社会との連携を強化するためのポータルとして、「伝統芸能ライブ」という上演情報サイトを運営し、多くの利用者を得ている。

Ⅱ. 研究成果の詳細

研究計画の達成状況

(1) 2014/06/07・08 渡米し、日本美術コレクターのエツコ・プライス、ジョー・プライス夫妻への聞き取り調査、ロサンゼルス・カウンティ美術館学芸員と面談。（一般非公開）。当該プロジェクトのため、昨年度、友禅染着物を制作。その際、京都ならではの題材をもちこみたいと考え、江戸時代の京都の画家・伊藤若冲の絵画をとりあげた。エツコ・プライス、ジョー・プライス夫妻のご協力を得、ご夫妻のコレクションから伊藤若冲《雪中鴛鴦図》・同《葡萄図》を原画として選択し、現在の感覚にもマッチした着物デザインを新たに創作した。当日は、ご夫妻への聞き取り調査の他、ロサンゼルス・カウンティ美術館服飾部門の学芸員 Sharon S. Takeda 氏と Kaye D. Spilker 氏とも、海外における着物研究の現状に関して面談した（一般非公開）。

・聞き取り調査

1. 調査日 2014/10/14 菌部染工

明治期に始まった墨流し染の変遷上であり、現在も墨流し染をおこなう菌部染工へ訪問調査を実施した。内容は、作業風景の動画撮影、染見本の撮影、染見本をもとにした染色技法に関する聞き取り調査である。作業風景の動画は、業務委託により編集し、可能であれば活動報告ブログ内での公開を予定している。

2. 調査日 2014/11/4 株式会社マドレー

上記の墨流し染めの流れを汲むマドレー染の資料を保存する株式会社マドレーに訪問調査を実施した。内容は、染見本をもとにした染色技法に関する聞き取り調査であった。

3. 2014/11/6 悠々亭（個人コレクション）

大阪市の染織資料蒐集家を訪問、調査し、近世後期から現代までの型染めのキモノ・布帛（綿・絹）、型友禅のキモノ、長襦袢などのコレクションを見学し、染織技法に関わる聞き取り調査を実施した。

4. 2014/12/04 株式会社キョーテック・株式会社キョーエース

戦前から型染め用の型を生産している同社へ訪問調査を実施した。内容は、工場内部の撮影、戦後の京都の染織産業・技法に関する聞き取り調査であった。聞き取り調査の内容を通じ、京都市内における機械捺染の盛況や各会社間での役割分担などの具体的状況が新たに判明した。聞き取り調査の内容は文字起こしをおこない、研究成果として論文などで発信していく予定である。

・2014年10月13日 立命館大学朱雀キャンパス1階 多目的室にて、『大学が、伝統工芸の今を考えるシンポジウム「つたえる力—京都の伝統工芸—」』を開催。当初10時～17時30分の予定であったが、台風接近のため午後のプログラムは中止。文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」（立命館大学）に関連した、

外部の研究者による研究発表と、ミニ企画展示として「協業—大学×伝統工芸」を隣接会場にて開催した。

- ・2015年2月22日 末川記念会館 講義室にて、国際シンポジウム・シリーズ つたえる力(2)「工芸研究とデジタル・ヒューマニティーズ」を開催する。2010年度から立命館大学アート・リサーチセンターに近代の型友禅図案が収蔵されたことをきっかけに、京友禅についての調査を開始。文献調査や聞き取り調査など、従来の研究手法のほか、データベースの活用や仮想空間での再現などのデジタル・ヒューマニティーズ的手法も併用しながら研究をおこなっている。本シンポジウムでは、海外や外部研究者らの視点を交えて本研究拠点の取り組みを紹介するほか、今後の研究の方向性を探る。

(2) 伝統芸能においては、流派別に継承活動の状況が異なっていることが判明。とくに金剛流は、流派の規模から、極めて厳しい状況にある。しかし、一方で、海外展開は、他の流派と比しても積極的な活動が見受けられ、海外の日本伝統音楽の研究者等のプロジェクトを受入れ、英語によるWEB上の教育サイト構築などに積極的にのり出しており、本研究でも、これらのプロジェクトとの連携活動を実施することで、海外の能楽への興味、需要・教育システムの展開について、考察する機会を得た。能装束や能面などの道具制作、ならびのその原材料生産問題については、やはり西陣の伝統産業が背景に存在しているからこそ継承できている点、関係者の見学会を実施することで、改めて情報を共有化することに成功した。また、この本課題においては、能楽に限定せず、関西地域全体において、伝統芸能がどのように公演されているのか、公演情報蓄積を行なっており、多くの一般利用者を獲得した。

<http://www.arc.ritsumeai.ac.jp/lib/dentogeino/>

若手研究者や後期課程院生の育成

(1) 本研究プロジェクトにおいては、共同研究者として若手研究者や後期課程院生が、研究の主力として多面的に活躍する場を設けた。山本真紗子（日本学術振興会・特別研究員（PD）はプロジェクトの中心メンバーである。また、博士課程前期課程の院生も、2014年6月7・8日の米国出張や、10月13日のシンポジウムで活躍した。

(2) 伝統芸能では、博士前期課程の院生が中心となり、8月1日から3日の片山家能楽京舞保存財団、能装束能面展（京都文化博物館）の展示に参加することで、実践的な能力の育成を行った。また、能楽ではないが、歌舞伎や伝統演劇の資料図書館である、松竹大谷図書館との共同研究に前期課程院生が参加し、クラウドファンディングという新たな文化事業ファンディング事業に参加することで、この分野の可能性について目をかせることに成功した。

研究成果発信・社会還元の様況

(1) 2014年7月12・13日 京都文化博物館別館ホールにて特別展『分業から協業へ—大学が、若冲と京の伝統工芸を未来に繋げる—』を開催する。1,700名以上が来場する。

- ・友禅着物・和鏡・唐紙・伏見人形の展示
- ・友禅染の品質管理のためのハイブリッド・ヴァーチャルタグの試み
- ・池坊による生け花とのコラボレーション
- ・ギャラリー・トーク（4回）等を含む。

詳細：<http://www.arc.ritsumeai.ac.jp/lib/GCOE/info/2014/07/post-106.html>

- (2) 伝統芸能では、上演情報発信サイト、「伝統芸能 LIVE」により、ひろく一般利用者に詳細な情報を提供している。また、能楽界の重要な家である片山家能楽保存財団その他の上演について、確実な映像アーカイブを実施しており、このコンテンツの社会還元が可能である。

Ⅲ. 今後の研究計画・展開

(1) 本研究の結果、現在、京都市内における染織産業従事者が減少の一途を辿り、廃業する工場も少なくないにもかかわらず、染織史研究の多くが近世や明治・大正期に偏り、戦前や戦後の染織産業の様相が十分に研究されておらず、産業と学術研究の動向に大きな隔たりがあることが判明した。

今後は、平成 14 年に廃業したが、現在まで工場の一部を操業当時のまま保存している、ある型友禅工房に焦点を当て、工房全体を記録し、その資料を収集・整理する計画を立案中である。膨大かつ良好な型友禅資料群であるので、あわせてその関連資料の収集も周辺業者に協力を依頼して行なう。さらにそれらの資料群が、これまで本学が収集してきた資料群や他の研究機関が収集してきた資料群とどのように関わるのか、比較検討を行ない、それらの有機的な組み合わせから型友禅技術の実態を詳細に記録する。また、それらのデジタル・アーカイブ構築にむけた基礎作業を行なう。

(2) 伝統芸能に関しては、教育システムへの提案として計画している能楽絵本の製作を具体化する予定であり、また、コーネル大学図書館のプロジェクトである、GloPAC（Global Performing Arts Consortium）との連携により、多言語による日本伝統芸のプロモーションの実践事例を作り上げたい。